

オーブン カレッジ

名古屋大学大学院
経済学研究科准教授

横山 和輝氏



「勤務評定方式から年功序列方式へのシフト」。これは平安時代の話である。律令国家を支えた8世紀ごろの貴族らは、勤務評定を通じて報酬や昇進が決められた。9世紀前半になるとその仕組みは形骸化し、在職年数が重視される。平安貴族は年功序列方式

親戚)の関係を持つ者が摂政(もとで働いていた。年功序列方式において、できるだけ少ない日数で任務を全うできる人気の官職があった。各年齢層ごとに人気の官職をスライドする昇進、それこそ「侍従↓近衛少将↓近衛中将↓参議」というコースは道長は、摂政には1年程し

平安貴族のインセンティブ

憧れの的であった。こういつか就任せず、そして関白には昇進コースを歩もうとする生涯就かず、内覧(天皇に先んじて文書を読み上げる役職)のため、貴族は人事権を掌握する主体に忠誠を誓う。平安貴族の代表的存在といえるのが藤原氏である。藤原氏は、天皇との外戚(母方の)

よこやま かずき 経済史
・金融論。博士(経済学・一橋大学)。1971年生まれ。

藤原氏の摂関政治支える

長の手にあった。上流貴族は、理想の昇進コースを歩むためにも道長を支持する。道長は、自らに反する者は徹底的に追いつめ、相手が再起不能となったときに手を差し伸べ、その出世をサポートした。こう司という地方官に任命される段「正月一日は」や、国司の敵になるうとする者は大方に赴けば、その権限によっての落胆ぶり(第二二段「すさ

平安時代は、温暖化あるいは洪水の頻発など、気候変動の激しい時期であったことが知られている。農業の収穫高

